

浮世絵の美

その三十八

☆

日本文藝家協会各員各

務

章

春の風と共に、男女の仲もやさしく柔らかな雰囲気になつて来て、新緑の季節を迎える。

今回は又喜多川歌麿に視線を戻して、いくつかの絵で学習してみよう。

この道の学者で評論家のリチャード・レイン氏の（コロンビア大学文学博士）の解説を引用しながら私の意見を加えて述べてみたい。

人類の歴史の中でエロチックアートとして輝いている国と時代はどこであろうか。

人間の種の存続としての性行動は、生命の原点であり、あらゆる動植物共通のものとして認知されている。しかしこれらの性の行為が文化として継続されるためには知識に加えて芸術性が必要である。

レイン氏は、それを次のように指摘している。古代ギリシア、古代ローマ、中世インドそして日本の鎌倉時代から近世ではないか。

特に日本では17世紀初めにかけて、エロティックアートの分野では、質量ともに格別に秀れている。しかもそれら残された作品類は有り難い事に膨大な数にのぼり、その中の最良のものは世界美術史の最高峰に位置するのだ。と絶賛しているのである。そしてこれらの春画作者は一般の普通の作品も数多く手掛けていて、挿絵本等には年記や時代の風物が入っているので、研究者にとっては、時代ごとの作風の変遷など、多くの事実を探求できるとしている。他に例を見ないすばらしさである。

女性の色気と豊かさ、美しさ、この三拍子が揃っていたと言つてよい。

ると私も心から敬服したい。さて歌麿の春画の話

をすすめてねばなるまい。

北斎と並んで江戸錦絵の双壁と言われ、今でも絶大な評価を続けている歌麿の春画は何がすばらしかったのだらうか。

その証拠は、美人画、特に大首絵と言われる顔だけを抜き出して描いたその表情を見れば納得がいくだろう。



これに加えて、先のレイン氏の評では、女性の持つ深層心理（心の奥に潜む本能を呼びさます感情）を一瞬にして見極め、それを絵に表現する

心理（心の奥に潜む本能を呼びさます感情）を一瞬にして見極め、それを絵に表現する

八

美しい顔の女の眼がキツとにらんでいる。左手に握りしめた恋文に怒りが見える。右手は男の襟くびをつかんでいて男は許してくれ、と左手を上げて降参の顔で口で何やら言っている様子。憤りのあまりか、女の裾がはだけて、露わになった局部までが、怒りに口を開けているようである（右図）。この瞬間をとらえた構図と男女の表情の心理描写は、確かに群を抜いていると言つても良い。

西洋のアートに果たしてここまで緻密な春画があるであろうか。

この一枚だけでも江戸庶民の日常が活写されていると言つてよい。

歌麿は一七五三〜一八〇六年。天明から寛政、文化時代の絵師であり「青楼の絵師」とも呼ばれ、その多彩な女性像は、諸外国でも大変好評である。「婦人相学十体」に見られるように多くの女性をモデルに、又大首絵で、当世有名な美人をピンガールとして描き上客筋からの注文も多かった

との事。しかも歌麿を支えたのは、当代一流の版元「耕書堂・葺屋重三郎」がいたからだと言われている。

洒落本・黄表紙・狂歌本の出版とそれの挿絵も仕事の量を増やしたとされている。特に絵入狂歌本として「画本虫撰」「潮干のつと」「百千鳥」の三冊が傑作との評価である。

この歌麿の浮世絵版画が頂点に達した時期は、一七九二〜一七九九(寛政四〜十一年)の頃だとされている。

この時期に、有名な「ねがひの糸口」と題した春画帖が出され、それをこえる作品はないという位に、女性の豊かさ、性の開放感、そしてエロティックな想像力を強く刺激したとされている。

この同じ時期(一七九八年)ヨーロッパではゴヤが「裸のマハ」(プラド美術館所蔵)を発表し物議を呼んでいる。そんな時代であったのだ。但し、レイン氏によれば西洋で



の春画も当時描かれてはいたが、歌麿どころか、二流三流の浮世絵師の水準にも達していない状況だった、と断言している。江戸の鎖国時代の情緒の豊かさに対しスベ

インでの長期宗教裁判を逃れ、フランスに亡命したゴヤの時代では品格豊かな女性裸像を描くこと等できなかったのかも知れない。

「ねがひの糸ぐち」の内容について語ってみよう。

例によって序文が、こった口上となつていて、読みとおすのは面白いが少しむづかしい

「寝賀秘笑緒口」

それ天地の開關せるや。会交てうえなるものは陽、したがって下なるものは陰。はやそのときよりして、おと

子・女の道さだまらりける。彼浮橋の逆銚をもて、かき探りたるも。

天満の真中にて、傘を枕に交合やつたるも。したたる精



露の鐙廬鳥をなすはおなじく。将八重垣の妻こめたるより、竹のはしらの世帯模擬なるまで、夕餐のかたまりにほかならず。されや、ずんぐりと

宮はしら ふとしきむすぶ神のいさめとて、十二神楽の調子を揃え。夜の衾もやれこれさと。十二番の大出物：後略

この文は説明に、「古事記」の天地創造神話を引用している。いざなぎ、いざなみの二神が、天の浮橋に立って、天の沼矛をもって海水をかきながらして引き上げた時に、矛の先から滴り落ちた雫が島となつた。これが淤能基呂島(日本)であるとされる。「八重垣妻こめた」とは、素戔嗚尊が出雲国に新婚の宮を建てる時の歌「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」を引用しているのである。

右のように序文は、こつて作つてあり、この中の最後に次の歌をのせている。

「ゆる／＼しきおまつりに紙をほしがる 毛物の春」

この紙をほしがる、は羊の事を指していて、羊年にこの作品を発表した、と指摘している。又交合に紙を使用する意味もあるとの解釈も成り立つてであろう。

さて「ねがひの糸口」の序図が又すばらしい絵で飾られていて、十二組の幕あきである。「美しい遊女と、ハンサムな若者(愛人)が吉原の待合いで会っ

ている」。初春の風景であろうか。この絵には詞書きはなく、ただ二人の男女が寄りそって坐っているだけである。しかしそのゆったりとした着物姿と、お互いに見合っている顔の表情が美しく、まだお祭りに入る前のやさしい前戯とも言えそうな雰囲気満たされている。その情景をレイン氏は次のように述べている。

構図は完璧で、左側の火鉢、煙管から若者の上体を経て、愛らしい遊女。その笄や簪、腕、顔へと至っている。遊女の左手は懐に入れられ、それが褌袴を顔に押しつけている。

人物の三角関係の構図は右側に見える男の上掛けと足で完成され、それに女の長い袖の掃くような曲線が加えられている。袖と裾には梅の花と烏帽子と扇子。冬の季節。綿入れと火鉢がくつろいだ感じで置かれている。

エロティックなものは何も描かれていないにもかかわらず、こんな場面を一度は経験したいと憧れるのは私だけではないだろう。(TNS)

☆

九